美術館小史

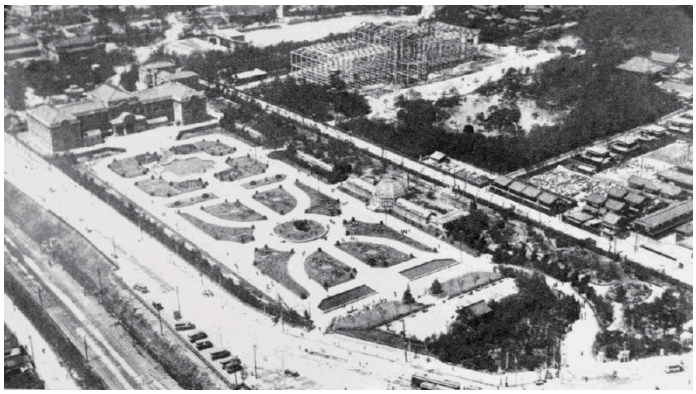

図1　天王寺公園（『明治大正昭和の大阪写真集5』より）

天王寺公園の航空写真（図1）です。左手には鉄道の線路が走り、中央を一直線に走る道路の右手の区画、公園の北側には庭園とその西奥に建設中の大きな建物の鉄骨が見えます。道で隔てられた南側の区画にはすでに整備された公園があり、その奥には立派な洋館が建っています。洋館は明治三十六年（1906）内国勧業博覧会の開催にあわせて建てられた美術館の建物（市民博物館として転用）です。写真の南半分は平成二十七年秋に整備されて「てんしば」として生まれ変わった場所です。一方、北半分に見える建築中の建物は現在の大阪市立美術館、そして慶沢園です。この北側の区画は明治期から住友家の敷地であり、後に邸宅と庭園が建てられ本邸となったのですが、その後大阪市に美術館用地として寄贈された部分にあたります。

美術館を撮った写真は以前から何枚か確認していますが、建設中の写真は初見でした。これは大阪市立中央図書館にある、『明治大正昭和の大阪写真集5』（1929）に掲載されており、平成二十二年（2010）の秋に大阪市立図書館が作成した「憩いのオアシス天王寺公園今昔（いまむかし）」Webギャラリーに紹介されていました。昭和四年刊行ですから、昭和十一年（1936）の開館の七年前に撮影されていた写真ということになり、鉄骨が組まれてから開館までに七年を要したことを明らかにする興味深い写真でもあります。

大阪市は大正九年（1920）三月に美術館建設を市議会に提案し、大正十三年（1924）に開館することを決めていました。当初は大阪城址に建築することを予定していましたが、大正十年（1921）十二月、男爵住友吉左衛門が天王寺の茶臼山の南側にある本邸敷地を美術館建設という条件で大阪市に寄付を申し出られたとこから、現在地への建設が決定しました。

大正十一年（1922）から十二年（1923）にかけて建築、展示についての調査、準備は順調に進んだのですが、同年秋に起こった関東大震災によって建築計画は止まってしまいました。全国の自治体に先駆けて建築されるはずだった美術館ですが、再開の予定がたたないなか、住友家から大正十五年（1926）に用地が譲渡され、市議会の議決から八年を経た昭和二年（1927）度から三年計画、百万円の予算を計上し建築計画が再開しました。昭和三年（1928）一月地鎮祭を行い、七月に基礎工事、続いて鉄骨組み立てを完成させ、昭和四年（1929）一月棟上げ、昭和五年（1930）五月にコンクリート工事を終了し、後は内外装および設備工事を残すまでとなっていました。

ところが、昭和五年に大阪市の財政上の都合により再び工事が延期されてしまいました。工事再開は三年後で、昭和八年（1933）になって漸く外装工事と屋根工事が完成しました。昭和九年（1934）度に内部設備その他を完成させる予定でしたが、その年の九月に大阪を襲った室戸台風によって大きな被害がでたため、完成は、またしても一年ずれて、昭和十年度に工事が完了し、翌昭和十一年（1936）五月一日に、計画開始から十七年をかけて落成式が挙行されました。

以上は昭和十一年に刊行された『大阪市立美術館年報』第一の美術館の沿革に書かれた内容ですが、写真は鉄骨が組みあがった頃のものなので、まさに掲載された写真集の刊行年である昭和四年頃の美術館を写したものなのです。

図2　住友茶臼山本邸和館（『住友春翠』より）

図3　大阪市立美術館土蔵

図4　土蔵の瓦

現在美術館の建つ北側の敷地は明治二十八年頃から部分的に住友家によって購入され、内国勧業博覧会の開催時には住友家の別邸が建てられていました。明治末年から大正の初年にかけて数寄屋風書院造の和館（図2）と洋館、土蔵などが野口孫一、日高絆の設計、八木甚兵衛の施工によって建てられ、小川治兵衛によって慶沢園が作られました。土地購入時茶臼山一帯は古墳や寺院や田畑が点在する静かな郊外であったようですが、博覧会の開催とともに市街地化がすすみ、様々な要因から住友吉左衛門はこの土地を手放す決意をしたようです。そのいきさつと、建物の詳細は泉屋博古館で昨年開催された『住友春翠』の図録に紹介されています。

美術館敷地とともに寄贈された慶沢園は昭和九年から市民に公開されています。住友邸ゆかりの建物として現存するのは、撤去を急遽とりやめたという土蔵（図3）の一棟ばかりです。この屋根瓦に住友の井桁の紋章（図4）があることを一昨年取材で当館を訪ねて来られた末岡照啓氏（住友資料館副館長）が発見されたことを末尾に書き添えて小文を終えたいと思います。

（土井 久美子）